

平城宮東朝集殿の復原模型

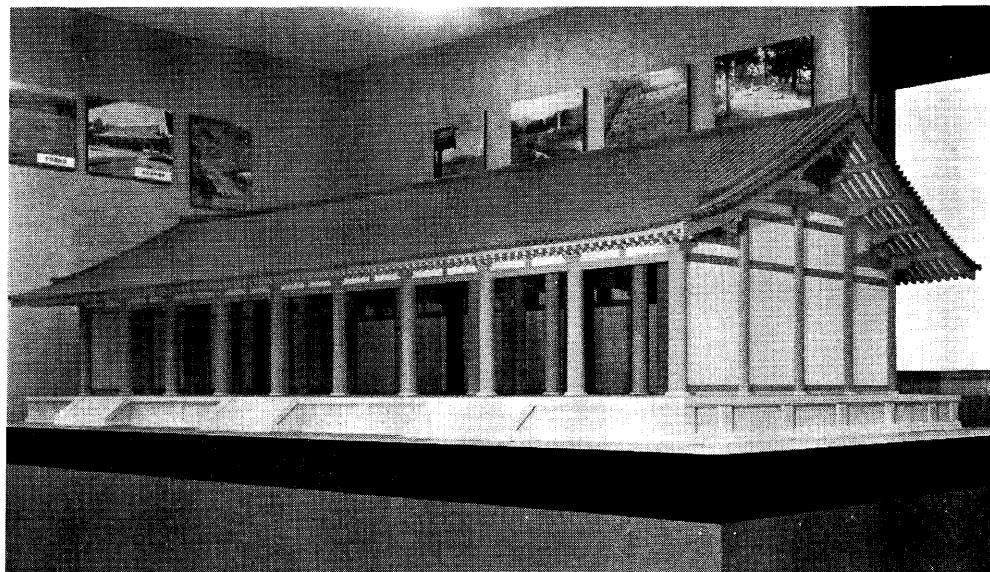
建造物研究室・平城宮跡発掘調査部

1965年度から毎年、文化庁記念物課の予算で平城宮建築の復原模型を製作しているが、本年度は第2次朝堂院東朝集殿1棟を製作した。東朝集殿は、切妻造りの南北棟で、西面していたこと、そして、のちに唐招提寺講堂として移建改築されたことが知られている。唐招提寺講堂は、1967年10月から奈良県教育委員会によって解体修理中であって、綿密な調査の結果、朝集殿当時の形態が解明されつつある。調査部はこれに呼応して、昨年度に第48次調査として第2次朝堂院東朝集殿跡を発掘調査し、遺跡の上でその実体を究明した。このように資料的にめぐまれた状態での模型の製作であったが、なお、推定にたよらざるをえない部分もあった。以下この推定をもふくめ、今回の設計にあたっての概要をあげる。

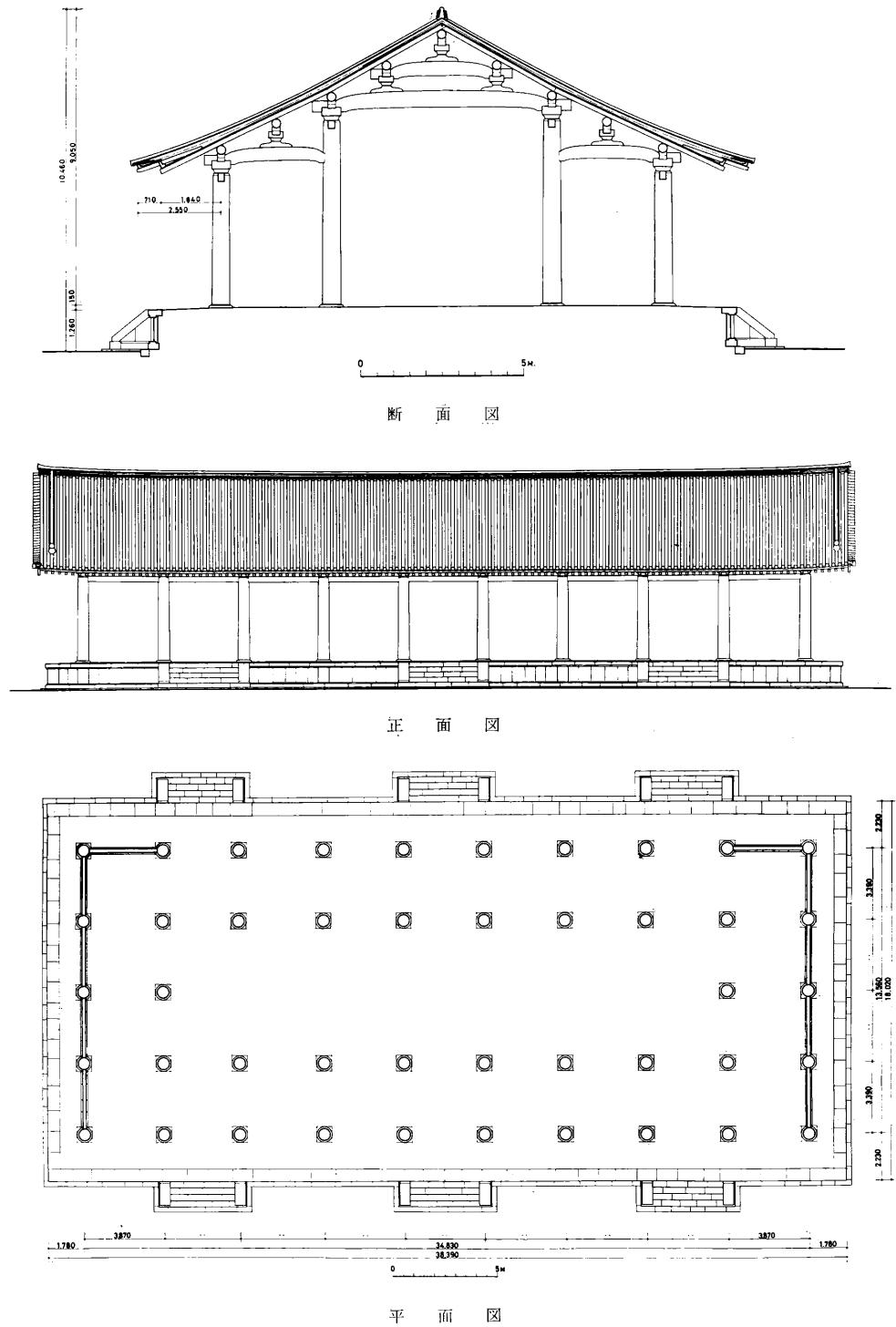
基 壇 発掘によって、凝灰岩基壇（東西16m、南北34m）の東西両面に、おのの3ヵ所に階段がつくことが判明した。基壇の高さは発掘した階段の出、および現講堂の旧地覆石と建築本体との位置関係によって、4尺余（天平尺 以下も同じ）あったことがわかる。

建物規模 現講堂の残存部材や番付けなどから、柱間数は9間×4間、柱間寸法はひとま桁行は13尺、梁行は11.4尺となる。これは発掘による基壇の規模ともよく符合する。

軸 部 現講堂には朝集殿当時のものとみられる柱が数本現存し、これによって側柱の長さは13.5尺、最大径1.9尺に決定した。柱間装置は、最も古式な土壁間渡し貫穴によって、側面全間と背面の両端間を土壁とし、ほかは開放とした。

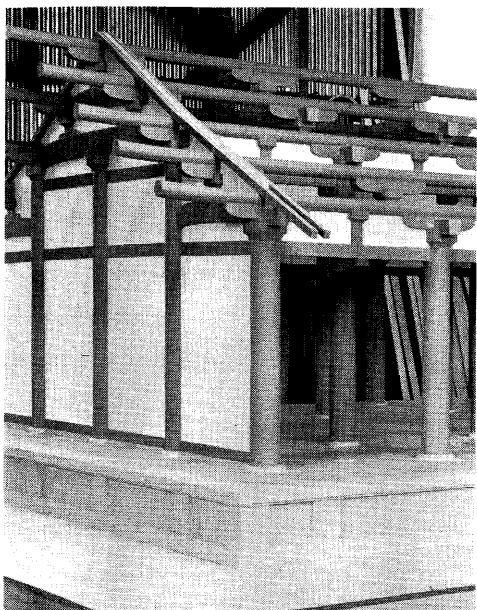


第1図 東朝集殿模型 平城宮資料館に展示中

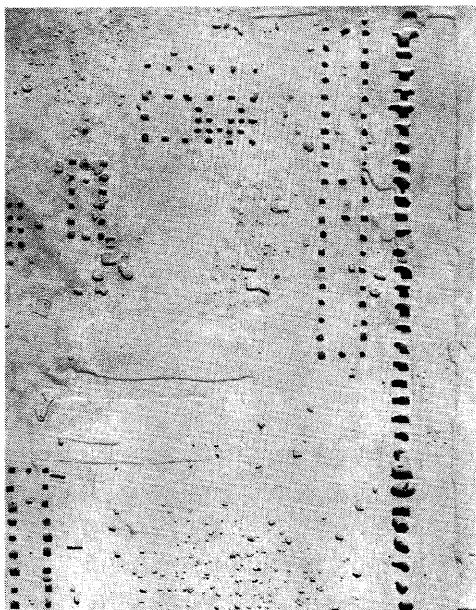


第2図 平城宮東朝集殿復原図

平城宮東朝集殿の復原模型



第3図 製作中の東朝集殿模型



第4図 馬寮の遺跡模型

斗 桁 解体前の推定どおり、大斗肘木となり、中備えには間斗束が入る。

軒・構架 構架は現講堂の虹梁その他の当初材によって復原でき、従来の研究にみるとおり、切妻造り二重虹梁棊股形式となる。垂木は地・飛檐とも角垂木で、大きさと出は残存部材によって推定可能である。垂木割りは現在よりあらく、ひとま12本配りにきめられる。けらばの出は発掘基壇と復原建物との寸法差によって推定できる。

屋根瓦 平城宮東朝集殿には、第2次朝堂院造営時のものとみられる6225-6663型式のセットが使われていた。この瓦は唐招提寺の現講堂周辺からも出土するから、瓦もふくめて移築したらしい。ほかに大型軒丸瓦6225L型式(直径26cm)が8個発見されている。模型では、大棟飾りが鴟尾ではなく鬼瓦と仮定し、大棟に2個、降り棟に4個、それに押み部分と軒隅とを含め、あわせて12個使用した。

このようにして、建物の解体調査と、遺跡の発掘調査との成果を直接つきあわすことができたのは、平城宮の建物ひいては奈良時代建築を考える上において貴重な機会であった。

なお、現講堂の大虹梁が朝集殿よりも一時期古い痕跡をもつ事実は問題を今後に残そう。

設計にあたって、奈良県教育委員会文化財保存事務所唐招提寺出張所の方々に多くの資料と助言をいただいたことを感謝したい。

なお、この他の模型として、馬寮東南部東西80m・南北90mの範囲にわたる地域の遺跡模型(縮尺1/50)をも製作した(第4図)。この模型は、発掘調査によってえた遺跡の状態を忠実に具現することを目的としたもので、すでに摂基壇建物一郭・内裏正殿周辺部が完成しており、その3回目の製作にあたる。今回の製作範囲には平城宮資料館の建設地が一部含まれている。

(細見啓三)